

ラテンアメリカ都市物語

＝ 第7回 ＝

レゲエと共に生きる街 キングストン

阿曾沼 和彦

1900年代終わりから2000年代初めにかけて、日本からのジャマイカへの来訪者は年間3万人を超えていた。日本の景気がよかった影響もあると思うが、このカリブ海に浮かぶ小さな島が日本でブームになっていた。内訳は概ね8割のハネムーンと2割のレゲエが好きな人々だった。航空会社も直行便を飛ばそうかと真剣に考えていたらしい。ところが、である。ここ数年日本からジャマイカを訪れる人の数は年間5,000人を超えることはまずない。はっきりした統計はでないものの恐らく2,000～3,000人といったところだろうが、今ではキングストンが主な渡航目的地になっている。



レゲエの神様、ボブ・マーレー銅像（写真はいずれも筆者撮影）

日本の経済悪化にともない、日本から遠くに位置するジャマイカへの渡航者は必然的に減少の一途を辿ってきた。キングストンを中心に発達してきたこの国特有の音楽レゲエも日本で深く愛されてきたが、ここ数年数字的にどん底状態である。日本特有の文化とっていいのだろうか、みんなで右向け右、こ

の法則にならいレゲエ＝ダサイ、のである。ある程度このレゲエで生計を立てている筆者にしてみれば、悲しい状況が続いている。一時期レゲエはジャマイカ経済の一翼を担っていた。今や輸出産業と呼ぶには程遠い存在になってしまった。他の主要産業であるボーキサイト、さとうきび、コーヒー、バナナ、観光も、これといった輝かしい経済効果をこの国にもたらしていない。

経済の悪化に反比例するかのように、キングストンでの殺人事件はとどまることを知らず、年ごとにその数字を伸ばしている。幸いなことに、テロは存在しない。一般犯罪だらけである。

毎年幾つかのハリケーンがカリブ海で猛威を振るっている。ただ、ここ数年ジャマイカを通過することはあっても直撃は免れてきた。特にキングストンは最小限の被害であった。国民曰く、神に守られた国だそうだ。今の状況でハリケーンの来襲は、特に経済関係で受け入れ難い。本当に神に感謝である。

今のジャマイカーキングストン市の概要である



スーパーマーケットよりも高い靑空市場

が、なかなかいいところを見出せない。だが国民一人一人は気楽に暮らしているように見受けられる。観光客用に売られている T シャツにプリントされた“JAMAICA NO PROBLEM”なのである。

ジャマイカはかつてスペインに、その後イギリスに統治されていた。先住民のアラワク インディアンはイギリスの植民地時代の奴隷制度のあおりでほぼ全滅してしまった。その後、西アフリカからパナマ運河建設のために連れてこられた奴隷の末裔がジャマイカに流れてきた。さらに中国、シリア、ドイツ等からの移民を受け入れ、現在の国家を形成してきた。いわゆるジャマイカを代表する先住民というのは遠い昔から存在しないのである。では、現在のジャマイカ人気質、あえて言えばキングストンニアン気質というのは、どういったものか考えてみたい。

あらかじめ断っておくが、筆者はジャマイカが好きである。好きでなければ何十年もここには住んでいなかっただろう。程度の差はあれ、キングストンに住む者は一般的に暴力的である。植民地時代にプランテーション栽培でこき使われ、マスターとスレーヴの関係が確立していたことが発端だろうか。マスターに知られずにスレーヴ同士でのみ意思を通じさせるための独特な言語、英語をベースにしているパトワ語が使われた。米国・イギリス英語も話せるのだが、多くはいまだにパトワ語を日常的に使用している。原因が何であれ一旦口論が始まると、外国人には理解困難なディープなパトワ語でのやり合いがエスカレートし始める。周りも参加し、誰彼関係なく“殺してしまえ”と叫ぶのを目撃したこともある。つい先日、ある有名な音楽アーティストが殺人罪で終身刑の判決が言い渡された。終日、このアーティストの音楽が、“あたかも英雄を称えるような感じで”ラジオで、タクシー車内で流されていた。誰れもが言う、そういった文化なんだよ と。以前某日本人アーティストがテレビの撮影でキングストンを訪れたことがあった。危険な匂いがプンプンする、これがいいね、と語っておられた。毎日この危険を肌身にかけて生活している者としては、甚だ同意しかねるものがある。

ジャマイカは独立後、基本的に2大政党で治世が行われてきた。この2大政党、テーブルの下で手を握っている部分も見え隠れしているのだが、各政党支持者への、特にキングストン市に居住する武装集団への武器の提供源への関わりであった。最近は無血選

挙も見受けられるが、1980年代は選挙＝戦争で多くの犠牲者を出してきた。キングストン市ダウントウン地域では、道路を挟んでお互いの支持基盤間で銃撃戦があり多くの者が死亡した。今でも市中至る所で、銃による犠牲者が後を絶たないのは、2大政党による武器提供の暗い歴史が引き継がれているようである。メディアは治安の悪さを常にトップの話題として取り上げているものの、一向に改善される見込みはない。いや、むしろ数字的には件数は毎年、前年度を上回っているのが現状である。大半がキングストンで発生している。想像してみたい。ジャマイカと同規模の新潟県で年間1,300人が毎年殺人事件の犠牲者になっている。犯人検挙率は10%以下。こんな数字が出れば日本では内閣崩壊は免れないだろう。

筆者の専攻は英文学であったので、経済には疎いが、キングストンの裏経済の仕組みについて少々説明しておこう。キングストン市に住む国民数約100万人、そして概ね同等の人数が海外、主として米国、イギリス、カナダで生活している。その彼らからの送金が、キングストン市に住むジャマイカ人の生計を支えている。故に、失業しているといった意識をそれほど持っていない。さらによく言われることだが、ジャマイカは冬がないので凍死がない、バナナ、マンゴがただ同然で手に入る、海に囲まれているので魚も豊富、餓死がない。海外からの送金があるとはいえ、基本経済は悪いので、楽な生活は望めないまでも、生きていけるのである。特に低所得者階級では失職の危機感は少ない。



筆者の戦場 - ONEPOP レコーディングスタジオ

この辺りで、筆者の専門でもあるレゲエについて述べさせていただくことにする。

一般的には、レゲエとは社会情勢を独特のリズムに乗せて表現していると思われているが、実際には、

社会情勢以外にも甘ったるい恋愛、愛憎物語、大麻関連等多岐にわたっている。日本にも根強いレゲエファン層が残っている。少し脱線してしまうが、大麻使用（医療目的外）は昨年来、所持量にもよるが個人使用では、罰金刑（日本円にして約 600 円）のみが適用され、逮捕されることも留置されることも前科がつくこともない。ちなみに罰金は税務署で払うことになる。以前から輸出目的及び大規模栽培を除き、大麻の所持、喫煙は割と自由であり、ジャマイカを訪れる観光目的の一つに数えられ、今でもその傾向に変わりはない。歴史的にレゲエと大麻（ジャマイカのブランド名はガンジャという）は深い関係にあった。注目すべきは、タバコは有害だと、手にしないアーティストも多くいることである。



今年のグラミー授賞式（中央：筆者）

レゲエという音楽形態が発生して 40 年そこらしか経っていない。その発展の過程でレゲエをともない、聖なる母としてのアフリカへの回帰運動を標榜して、これまであった宗教ラスタファリズムがレゲエアーティストの間で盛んに語られてきた。極めて平和な思想である。そして今アフリカでそのレゲエが盛んになっている。以前は思想的にアフリカにそのルーツを求めていたが、現在はレゲエの市場として可能性を追求している。これまで、米国、ヨーロッパ、日本がレゲエの主要市場であった。現実的には売れないという厳しい状況を何とか打破したいと、関係者は苦慮している。今年第 60 回を迎える音楽界最大のアウォード グラミー賞にレゲエ部門が 1984 年設置され、今に至るまでカテゴリーの一つとしての確固たる位置を保っているが、もっとグローバルに受け



西インド諸島大学 モナ校

入れられる音楽形態への変化が必要ではないかとの思いは筆者だけではないはずだ。

キングストン市には、カリブ海各国に点在する中でも最大の規模を誇る西インド大学がある。ここは医学部を併設し、大学病院の設備もしっかりしている。また、原子力の研究機関もあり、実際原子力資源を使用して研究がなされているという。他に技術大学もあり、カリブ海における学術都市の一面もある。

キングストン市はジャマイカの縮図である。あらゆる機能－政治、経済、文化、スポーツが凝縮されている。行政のほとんどもキングストン市に集中している。そしてそこで働く公務員の多くが女性である。1970 年代共産党寄りの政策を掲げた与党に嫌気をさし、優秀な人材、特に多くの男性がジャマイカを見捨て、海外に移住した。当時を知る者によれば、キングストン市は女性だらけであつたらしい。最近では、女性 1: 男性 1 であるが、いまでもここキングストンでの主要労働者は女性が多い。

一般的にジャマイカ人は保守的である。キングストン市に住むキングストニアンがいくら先進的であろうと、キングストン市が大きく変化を見せることは考え難い。発展するにしろ、後退するにしろ、だ。斬新な空気を政治に求めてもとても無理だろう。資源がないので好景気を期待することもできそうにない。治安の改善は急務である。

筆者が初めて足を踏み込んだキングストン市、もう 33 年も前になる。キングストン市民の顔には笑顔が見られた。何もかも今より安定して、いい街だった。当時よりもっとキングストンに笑顔を求めるのは無理な相談であろうか。

（あそぬま かずひこ ジャマイカ国在住音楽プロデューサー）